

# 研究所だより

第462号  
2023年10月11日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“ あれ松虫が 鳴いている ちんちろ ちんちろ ちんちろりん  
あれ鈴虫も 鳴き出した りんりんりんりん りいんりん  
秋の夜長を 鳴き通す ああおもしろい 虫のこえ ”



『虫のこえ』 1912年(明治45年)文部省(文部科学省)唱歌

## ～収穫の秋・紅葉の秋～

日中の日差しはまだ厳しいですが、朝晩の肌寒さに深まる秋を感じるようになりました。暦の上では8日は“寒露”。寒露とは、草花に降りた露が寒さで凍ってしまいそうになることを意味しています。この時期に迎える旬の食べ物は、梨、栗、松茸などがあります。寒露は、空気も澄んでいてお月見にぴったりの季節です。寒露の時期は、十三夜といって、特に月が美しく見える時でもあります。十三夜は、秋の収穫に感謝しながら、美しい月を愛でる、日本独自の風習です。今年の十三夜は「10月27日(金)」です。秋の夜長に温かい飲物を持ってお月見するのもいいですね。季節の変わり目ですので、健康にはくれぐれもご注意ください。



## いま必要な校内研修6

「指導と評価」9月号より

## 〔 教員チームの組織力・実践力を高める校内研修・校内研究 〕

かわむら しげお  
河村 茂雄 (早稲田大学教授)

学校教育に期待される教育内容はますます増加し、多様化している。そして、それらに教師が個人だけで対処していくやり方は、すでに限界を超えている。どのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかというカリキュラム・マネジメントを行うことが、各学校に不可欠である(中央教育審議会、2015)。

各学校の教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を子どもの心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画が教育課程である。各学校の児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づいて教育課程を編成し、実施・評価・改善を図ることが中心的な取組になる(PDCAサイクルの推進)。

校内研修・校内研究は、その学校がかかえる教育課題の解決を志向する取組であるから、学校の児童生徒の実態を把握することで問題が抽出され、それが校内研修・校内研究のテーマにつながっていく。そして、そのテーマを解決するために、教師たちの指導行動を向上させるスキルトレーニングなどが校内研修で取り上げられていく。しかし、多忙な学校現場では、こうした校内研修・校内研究の時間を十分にとることが難しくなっている。教育課題の解決のために、今後、校内研修・校内研究をより効率的に展開することが求められる。

### 1 教師たちに求められる資質・能力

教育実践の成果は、その学校の教員組織の状態と関連している。高い成果をあげている学校の教員組織

は、教師たちの「自主・向上性」と「同僚・協働性」の2点が統合されて、高く確立されている(河村2017)。「自主・向上性」とは、教育実践の向上を目指して教師個々が自主的に学び続ける意欲と行動の高さのことである。「同僚・協働性」とは、学校全体の教育活動に対して組織的に取り組める同僚性と協働性についての意識と行動の高さのことである。

この2点が高い学校の教員組織は、活があり、教師同士に、①支え合い、②学び合い、③高め合い、がある。つまり、組織全体が学習する能力を備え自己改革していく「学習する組織」(Senge,1990)になっているといえる。その結果、校内の教育実践が教師たちによって主体的に、かつチームで取り込まれ、高い成果をあげている。

このような教員組織の学校では、所属している教師たちのメンタルヘルスも相対的に良好なのである(河村、2017)。

## 2 教師たちの「自主・向上性」と「同僚・協働性」を高める校内研修・校内研究

教員組織の「自主・向上性」と「同僚・協働性」は、教師たちの協働活動・学習を通して高められていく。そして、学校内で活用できるおもしろい協働活動・学習の1つが、校内研修・校内研究なのである。つまり、成果をあげている学校では、校内研修・校内研究を、組織づくり・組織対応に効果的に活用している。PDCAサイクルを推進し、業務を改善していくことと平行して、組織とコミットした個々の教師の「自主・向上性」と「同僚・協働性」を向上させていくのである(河村、2017)。

以下で、カリキュラム・マネジメントのPDCAサイクル各段階での、校内研修・校内研究のポイントを確認したい。



## 3 校内研修・校内研究でのポイント

### (1) Plan (計画)

校内研修・校内研究に掲げるテーマは、①各学校の教育課題と関連があり、②その解決の必要性を教師たちが実感し、③みんなで取り組んでいくことが大事であると理解されていることが必要である。

①②に関しては、学校での仕事が自分のやりがいにつながっていると感じられること(エンゲージメント)が不可欠である。それにより教師の「自主・向上性」も高まる。したがって、各学校の教育課題を抽出するプロセスでは、所属する児童生徒の実態把握を実証的に詳細に行い、問題を生起させている要因を明確にして、個々の教師がそれを納得し、解決すべき課題であると実感できるようにしなければならない。そのうえで、現状から解決をイメージし、そこに至る計画(ビジョン)を立てることが必要である。

児童生徒の実態と実践の成果の指標には、教師の手ごたえや観察データだけではなく、第三者が納得する客観的指標(出席日数、テストの点、心理検査の結果など)を用い、実施前と実施後の変容を検討できることが必要である(有意差検定を行えるとよい)。

さらに③に関しては、ビジョンが構造化されていること、その達成には校内の全ての教師のさまざまな領域の連携した取組が不可欠であることが示されていること、協働で取り組む意義を理解できることが、教師の「同僚・協働性」の基盤になる。この段階で、校内で構成的グループエンカウンターなどを実施して、教師間のリレーション形成を促進している学校も少なくない。

以上のことを校内研修・校内研究に位置づけて丁寧に行っていくことが、各教師が主体的かつ教員チームで協働して学校運営のビジョンを達成していこうという組織風土の醸成につながっていく(ビジョンの共有化)。

これらの手続きを、校内研修・校内研究の場で確実に取り組むことが大事なのである。

### (2) Do (実行)

この段階では、Planの段階で示された取り組むべき内容が、教師のどのような指導行動として求められるのかというレベルにまで、細かく具体化されていなければならない。そうすることによって、必要とされる知識や技能の内容とレベルが明確になる。その結果、

校内研修でどのような知識や技能を習得する必要があるかが明確になり、教師たちの取組へのコミットメントが高まる。

### (3) Check (評価) & Act (改善)

教師たちがビジョンの達成に取り組んだ成果は、計画段階で児童生徒の実態をとらえた測定値がどう変容したか、その度合いで評価することが基本である。その結果、どのような取組に効果がみられ、どのような取組は効果が乏しいかなどを明確にでき、それが次年度の新たなビジョンや、校内研修・校内研究のテーマになっていくのである。

そして、校内研究会で、実証的な評価に基づいて教師の指導行動や組織的な取組に関する検討がなされることは、教師同士の高め合いにつながる。各教師の学びを刺激して、「自主・向上性」と「同僚・協働性」を高めていくことにつながるのである。

### おわりに

学校現場多忙だからこそ、校内研修・校内研究は、学校の教育課題達成のPDCAサイクルの各段階に位置づけ展開していくことが大切である。また同時に、教員組織づくり・組織対応に活用していくことが不可欠である。成果を出している学校では、すでに実践されていることである。

## 第1回学力向上検討委員会～

9月28日(木)に第1回学力向上検討委員会が開催されました。検討委員会の構成メンバーは、校長会を代表して下川口小：永野 美華子校長、清水中：斧川 哲也校長、研究主任を代表して清水小：清水 聡教諭、清水中：橋 智子教諭、教育委員会・宮上 美智子指導主事並びに研究所・谷岡・勝間の7人です。今年度の委員長に永野校長、副委員長に斧川校長が選出されました。

はじめに設置要項等の確認をし、役員選出を行いました。協議では1. 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について、各校の分析状況(正答率)、並びに問題別調査結果(全国との差)について資料を基に土佐清水市の状況の確認、2. 今後に向けた取組については、①授業改善・授業改善プラン(PDCAサイクルの徹底)、授業づくり講座での学び、授業アイデア例の活用、②加力・家庭学習・一人一台の端末の活用、デジタルドリルやダントツシートの活用、③単元テストの確認を徹底していくことなどを話し合いました。また小中学校の取組についても情報交換を行いました。最後に、3. 令和5年度高知県学力定着調査に向けて(日程・実施教科について)、4. その他 更なる学力の向上に向けた課題と今後の方策などとして、①各校で分析したことを実践し、検証していく、②全員で徹底していく、③授業改善プランを柱に、日々の授業の確認をしていくことの3点を確認しました。

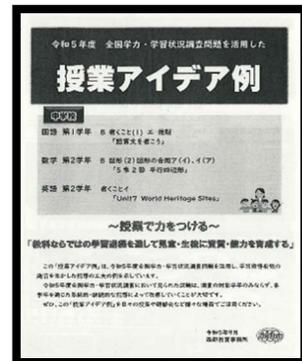
### 〈授業アイデア例の活用〉

#### ○令和5年度高知県学力定着調査日程

- ・小学校 令和5年12月 5日(火)
  - 4年：〔国語・算数 質問紙〕
  - 5年：〔国語・算数・理科 質問紙〕
- ・中学校 令和5年12月 5日(火)
  - 〔国語・社会・数学〕
  - 12月 6日(水)
    - 〔理科・英語 質問紙〕



〔小学校〕



〔中学校〕

\* 出題範囲は、6月27日付けの文書で送付済み

## 第4回教研推進委員会

10月10日(火)に第4回教研推進委員会を開催しました。各校からの貴重な意見を基に、一日教研の総括と次年度の一日教研の日程、講師、内容等並びに今後の市教研の在り方について協議を行いました。協議内容(抜粋)について報告します。

### 1. 協議(各校から出されていた意見の抜粋)

#### (1) 一日教研(8/2)の反省

- ①期日について
  - 《小》《中》
    - ・この時期(8月上旬)で良い(適切)と思う。(早めに関催できて良かった)
    - ・昨年度初任者研修と重なっていた先生がいたので、今年はどうだったのか気になった。
- ②内容について
  - 午前：開会行事・講演(オンラインによる3会場開催)
    - 《小》《中》
      - ・講演がオンライン開催なら、3会場に分かれて行うのは良かった。
      - ・講演内容も情報モラルは学校現場で必要なことなので、専門に研究されている内容を聞いたのは良かった。とても分かりやすく、いい講演会(講師)だった。
      - ・話を聞くだけでなく、近くの人とペアやグループになって話し合う活動もあり、時間があっという間に感じられた。
      - ・事情はあると思うが、講師の先生が来てくれて全体で聞けたらと思う。
  - 午後：各部会研修
    - ・各部会が工夫した内容(講師招聘、指導案検討、教材研究等)で取り組んでいると思う。
    - ・清水高校の先生たちも参加してくれて良かった。
- ③会場
  - ・オンライン中継の講演であれば、清水小・中学校のように自校で見られるようになるといい。会場の準備・集合の心配が軽減し良いと思う。
  - ・来年度以降もオンラインによる3会場開催がいいと思う。
  - ・市役所(公民館)の駐車場については、詳細な案内を周知してほしい。
- ④来年度に向けて
  - 希望分野や講師について協議した結果、喫緊の教育課題・児童生徒理解の分野での話が拝聴できたらということで、下記の2人が推薦されました。
  - 第1希望：是永 かな子教授(高知大学教職大学院)
  - 第2希望：松久 眞実教授(桃山学院教育大学人間教育学部)

#### (2) 今後の市教研の在り方について

各学校、各部会から提案していただいた意見を基に協議しましたが、教育委員会の意向も聞いてから再度検討することになりました。

#### (3) 2024年度一日教研について

来年度については、8月第1週目に予定していますが、講師の都合をお聞きしてから最終決定をします。

- ①期日：2024年 8月 7日(水) \* 予定
- ②会場：3分散会場(中央公民館、清水小、清水中)
- ③講師：調整中

#### (4) 第5回教研推進委員会

日時：12月 7日(木) 16:00～  
会場：教育センター

